

「神の母聖マリア」の祭日

中野裕明司教 ミサ説教

2021年1月1日 鹿児島カテドラル・ザビエル教会

皆さま、2021年、新年明けましておめでとうございます。

私たちは日本国の祝日であるこの元旦に、「神の母聖マリア」の祭日をお祝いいたします。全世界の教会が、年の初めに神の母聖マリアをお祝することは、単なる偶然でしょうか？

先ほど読みあげられた、「八日経って割礼の日を迎えた時、幼子はイエスと名付けられた」という言葉を聞きました。これはマリア様が、モーセの律法に従って、幼子に割礼を受けさせるために、神殿に詣でた際、大天使ガブリエルの指示に従い、イエスと命名した、という記録です。つまり、12月25日のイエスの誕生から八日目のことになります。従って、世界中の暦が変更されない限り、永久に全世界の教会は、年の初めに神の母聖マリアを祝い、彼女のとりなしを祈ることになります。

では、このお祝いは、いつから始まったのでしょうか。それは、イエスの誕生から約430年後のことになります。ご承知かどうかわかりませんが、キリスト教が古代ローマ帝国内で公認されたのは、313年のことです。時の皇帝コンスタンチヌスがキリスト教に改宗した母親ヘレナの影響で、それまで迫害の対象であったキリスト教を公認しました。クリスマスが、12月25日と定められたのは、当時、皇帝はミトラ教を信仰していました。ミトラ教は、太陽を神として拝んでいたので、12月22日の冬至の後、日が徐々に長くなる25日ごろに太陽神のお祭りを催していました。そんな具合で、コンスタンチヌス皇帝は、これからはキリストこそ我々の太陽神であるとしたのでキリストの誕生日が太陽神のお祭りの日に定められた、と伝えられています。

話を元に戻しますと、キリスト教が公認されて以来、信者数は増え教会は栄えました。しかし、イエス・キリストとは、果たしてどのようなお方なのかについて、聖職者間で議論が生じました。しかも、ローマ帝国内の人心の不一致が目立ってきたので、コンスタンチヌス皇帝は、教会関係者（聖職者や神学者たち）を一堂に集めて、会議を開催しました。それが、第1回ニケア公会議です。325年のことでした。この会議で主に議論されたのは、旧約聖書に描かれている神様と、イエス・キリストとの関係です。激論の末、前者と後者は「同質の神」であることが、決定されました。

次に議論になったのが、イエス自身の本性についてでした。大雑把に言えば、イエスは神だということけれども、所詮人間に過ぎないのではないか、あるいは、人間の姿は、仮の姿であって十字架上で命を落としたのは、彼の肉体だけであって、彼の神性は死ぬはずはない、といった議論が沸き起こりました。いわゆる、「キリスト単性」です。

そこで、キーワードいわゆる、核心の文言となったのが、381年のニケア・コンスタンチノーブル信条の次の文言です、

「主は、私たち人類のため、私たちの救いのために天から下り、聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、人となれました。」

ここで言われている、主とはイエス。キリストのことです。イエスのことを「主」と呼ぶのは、天の御父と同質であるという意味です。

つまり、神であるということです。その神が、「おとめマリアよりからだを受け、人となられた」と宣言しているわけです。聖霊によって、というのは、法律上の夫ヨゼフの子ではないという意味です。おとめとは、処女という意味です。つまり、神は人間であるマリアから人間のからだをもらったということです。しかも、処女のまま母になられたということになります。

その後、431年のエフェゾの会議後、教会は、マリアに、「神の母、終生おとめなる聖マリア」をいう称号を付与しました。これに対して、ネストリウスという人が、「神の母」ではなく、「キリストの母」が相応しいと言って反対しましたが、この議論は、450年のカルケドン公会議まで尾を引きました。

「神の母」か「キリストの母」かの議論の意味については、今回は言及できませんが、この議論についての専門家は故竹山昭神父様であることをお知らせ致します。少し、長くて、難しいお話になりました。

しかし私が強調したかったのは、マリア様のとりなしを祈り、マリア様を思慕することは、実はイエス・キリスト様を深く理解することにつながる、ということです。

この一年神の母であるマリア様の取次を願いながら、世界平和のために祈り行動してまいりましょう。